

268. 上田上牧遺跡出土の 鉄製鎌について

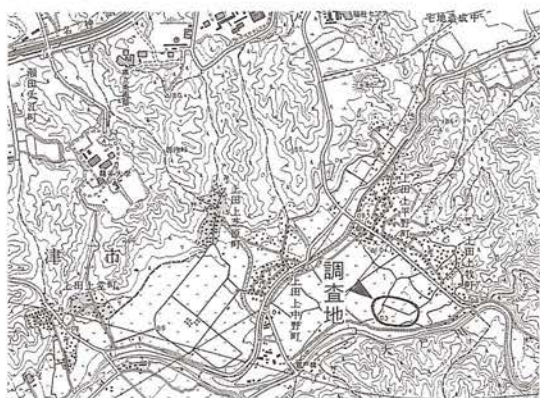


図1 調査位置図

1. はじめに

大津市上田上牧町に所在する上田上牧遺跡からは、平成8年度の調査で江戸時代の中頃を中心とする近世の集落跡が検出された。今回は、その中から井戸埋納の祭祀が行われたと考えられる石組井戸出土の鉄製鎌2点について紹介し、その後若干考えたことを述べたい。

2. 遺跡の概要

当遺跡では、県営ほ場整備調査に伴うこれまでの調査で古墳時代から近世にかけての集落跡や墓跡が多数検出されている。

平成8年度の調査地は、現在の上田上牧町の集落から離れた大戸川沿いの田園地帯であった。当地には、江戸中期(元禄年間)におこった大戸川の洪水によって現在の集落の山手に移った「牧村」があった場所だと言いつづ残っていた。実際調査してみると、言いつづのとおり江戸時代中頃を中心とする遺構や遺物が数多く発見され、それを実証することとなった。検出された当該期の主な遺構は、溜拵状を呈する石組遺構・石組井戸・便槽かと思われる桶をいれた二基一組の土坑・区画溝・石垣などである。

3. 鉄製鎌について

図2-1の鎌は、内径1.1m・深さ2.3mの石組井戸(T7 SE3)の最下部から木製の横杵などとともに出土している。この井戸は、井戸廃絶に際して何らかの祭祀が行われた後、黄灰色系の砂でただちに埋め戻されたようである。柄の部分は残存していなかったが、刃部の推定長15.0cm・幅4.0cm・厚0.5cmを測る。茎部は先端を鍵状に曲げられている。上半部に目釘穴が開けられ、締め金具が付着しているため、刃部は目釘と締め金具によって固定されていたと推測される。

図2-2の鎌は、内径1.2m・深さ2.6mの石組井戸(T6 SE2)から出土した。共伴した遺物は、三枚の銅銭・土鈴・鉄製の包丁などである。この井戸は、埋める際には黄灰色の砂と上記の遺物を交互に入れて丁寧に埋められていた。この井戸も井戸廃絶に際して何らかの祭祀が行われたようである。刃部しか残存していなかったが、刃部の推定長17.5cm・幅37cm・厚さ0.5cmを測る。1と同様の形式の鎌であったと思われる。

図-2-1・2の鎌は、今日につながる着柄の形式をもっている。この形式のものはいつ頃から出現してくるのか明らかにされていないが、鎌倉時代の『石山寺縁起絵巻』に見られる釘は目釘と口金で鎌先と柄を留めていると言われ、中世にまでその出現の時期が遡るようである^①。

4. 井戸に埋納された鎌の類例

残念ながら近世の集落遺跡は、都市遺跡に比べ調査例が少なく同時期の類例を見つけることができなかった。

しかし中世に遡ってみると、広島県の草戸千軒町遺跡などでは室町時代前半頃から、刀子・短刀・刀型木製品などとともに埋納されはじめ、出土例も増加してくるようである^②。

5. 資料に見える鎌の使用例

A. 『石山寺縁起絵巻(第五巻)』(鎌倉時代)^③

木を切り、草を払って境内地をつくる中に右手で草を持ちつつ右手で刈っている様子が描かれている。

B. 『一遍聖絵(第五・十二巻)』(鎌倉時代)^④

第五巻では、白河関付近の情景の中に農道を歩く、

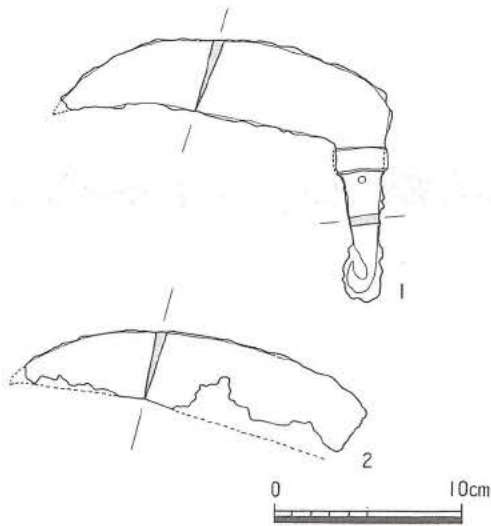


図2 出土製鉄鎌実測図

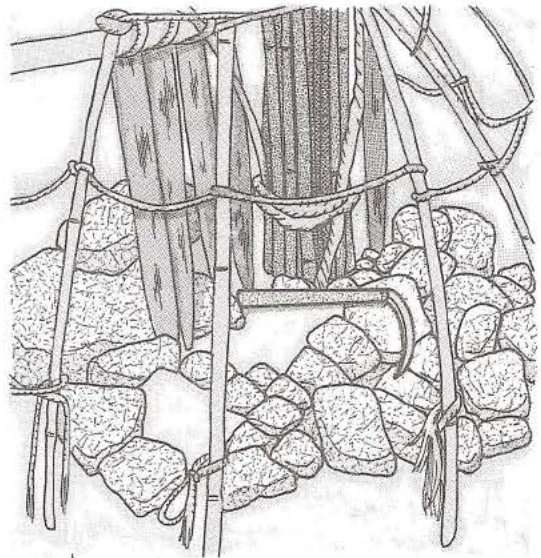


図3 鎌の民俗例^⑧

稲を運ぶ男が描かれている。男の腰には鎌がさしてある。また、第十二巻では、一遍上人が兵庫光明寺で臨終のまへのさまを描いた中に正座をして念仏をとこなしている農民が二人描かれている。この男たちのうちの一人は腰に鎌をさし、もう一人は膝元に編傘あみかさと荷縄にわなわとともに鎌を置いている。

C. 『百姓伝記』(1673~84年)^⑤

鎌は「稲・麦其他の物をかり、草をかる鎌の外に、竹木もきり、また用心むきに手鎌と言うものがある」とする。稲・麦には同書によると同じ物を使い、砥石を選んで使ったので銛しのがまはなかったようである。

D. 『農具便利論』(1882年)^⑥

江戸周辺の広野・堤腹で立姿で使う大鎌のあることを記している。「手鎌は護身用であるとともに竹木をきり、用水取入口の修理などに丈夫に作らせる。このほか古鎌は雑事用にも使う」とある。

4. 鎌の民俗例

鎌は収穫を象徴する用具であり、稲の収穫が済んだあと「鎌あげ」・「鎌づか洗い」・「鎌祝い」などといって鎌を洗って飾り、鎌に供え物を祝う習俗は各地に見られる^⑦。

しかし一方、鎌は呪力をもつと信じられてきた。墓の上に鎌を立てたり吊したりすると魔除けになるという信仰も近畿地方以东の東日本に広がっている。(図3)

5. おわりに

様々な観点から鉄製鎌を見てきたが、まとめると次のようになる。

①鉄製鎌が井戸埋納祭祀に使用されるようになるのは室町時代前半頃である。また推測であるが、当初は短刀・刀子・刀形木製品などとともに埋納されていた事から考えると、鎌は収穫用具としてよりも刃物としての意味を持ち井戸に埋納されたと言える。

②製鉄鎌は稲・麦・草刈り以外にも護身用としても使用され、農民にとって最も身近にある武器であった。

③製鉄鎌は呪力をもつと信じられ、魔除けにも使用された。

これらの事から考えると、上田上牧遺跡の井戸から出土した鎌は、当時の農村の人々に最も精神的・実質的に身近な刃物であると同時に、魔を払う神聖なものとして井戸に埋納されたと考えられる。(杉原 咲子) 註

①平井伸吾「草戸千軒町遺跡出土の鎌」『草戸千軒 第15巻』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1998

②『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 各刊による

③宮本常一編『常民生活絵引』

④前掲『常民生活絵引』

⑤『日本農業全書 16巻』(農山漁村文化協会) 1979

⑥前掲『日本農業全集 15巻』

⑦『日本大百科全書 5』小学館 1985、「鎌」の項

⑧橋本鉄男『日本の民俗 滋賀』1972年のP229をトレースした。滋賀県高島郡今津町井伊の例、埋葬後の塚の上に鎌が置かれている。

269. 赤野井湾・小津浜遺跡 出土の鉄鎌

はじめに

赤野井湾遺跡・小津浜遺跡は守山市赤野井・杉江地先の赤野井湾内とその湖岸に位置する。赤野井湾遺跡は縄文時代早期と弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした、小津浜遺跡は弥生時代前期から中期を中心としたいずれも集落・生産遺跡である。

鉄鎌は赤野井湾遺跡では天神川1・2調査区の飛鳥時代までの土器を含む溝から7点と包含層から1点の計8点、南2調査区で平安時代までの遺物を含む旧河道から5点、包含層から1点の計6点の合計14点が出土している。小津浜遺跡は古墳時代中期の自然流路から小型丸底壺などの祭祀遺物と共に3点、包含層などから2点の合計5点出土している。いずれも、琵琶湖開発工事に伴う発掘調査で出土した^①。滋賀県下の古墳時代の集落遺跡から鉄鎌が30点出土しているが^②、赤野井湾遺跡・小津浜遺跡からその内の6割強の19点が出土している。

鉄鎌の特徴・分類

鉄鎌の法量は全長が14.7cm～19.5cmで、刃幅は2.3cm前後である。欠損品でも長さを復元できそうなものは15cm前後が多い。おもな形態の特徴は無茎で、基部に折返しを持ち、峰が直線的に伸びるものとやや湾曲するものがあり、刃部緩やかに内湾する曲刃が多い。形態分類^③では中型の曲刃のにあてはまるものが(1・7・8・9・15・18・19)などである。完成品以外でも(2・3・11・12・16)などは中型の曲刃鎌であろう。中型曲刃鎌は5世紀末から6世紀にかけての古墳から多く出土している。

直刃鎌は完成品ではないが(17)や、破片の(4)などは直刃の可能性がある。(13)残存長が17.2cmで刃幅が4.0cmと広く、完形品に復元すると20cm以上になり、大型の曲刃鎌に分類できよう。また、(14)は全長8.6cmで両端が欠けているが、曲刃鎌の中央部と思われるが、穂摘み用の手鎌の可能性もある。

折返しの技法

基部の折返しは17点に残る。この折返しから推定する着柄角はa類(直角のもの)2点、b類(95°～110°のもの)14点、c類(110°以上の鈍角のもの)1点である。c類は草刈よりも鉈のように木の枝などを伐採するのに適している。a・b類の110°未満のものは稲や草刈用に適している。

折返しの技法では刃先左・刃部下に置くと、折返し表側になるもの(甲類)が8点、裏側になるもの(乙類)が9点ある。鉄鎌の折返しは乙技法が大陸の影響



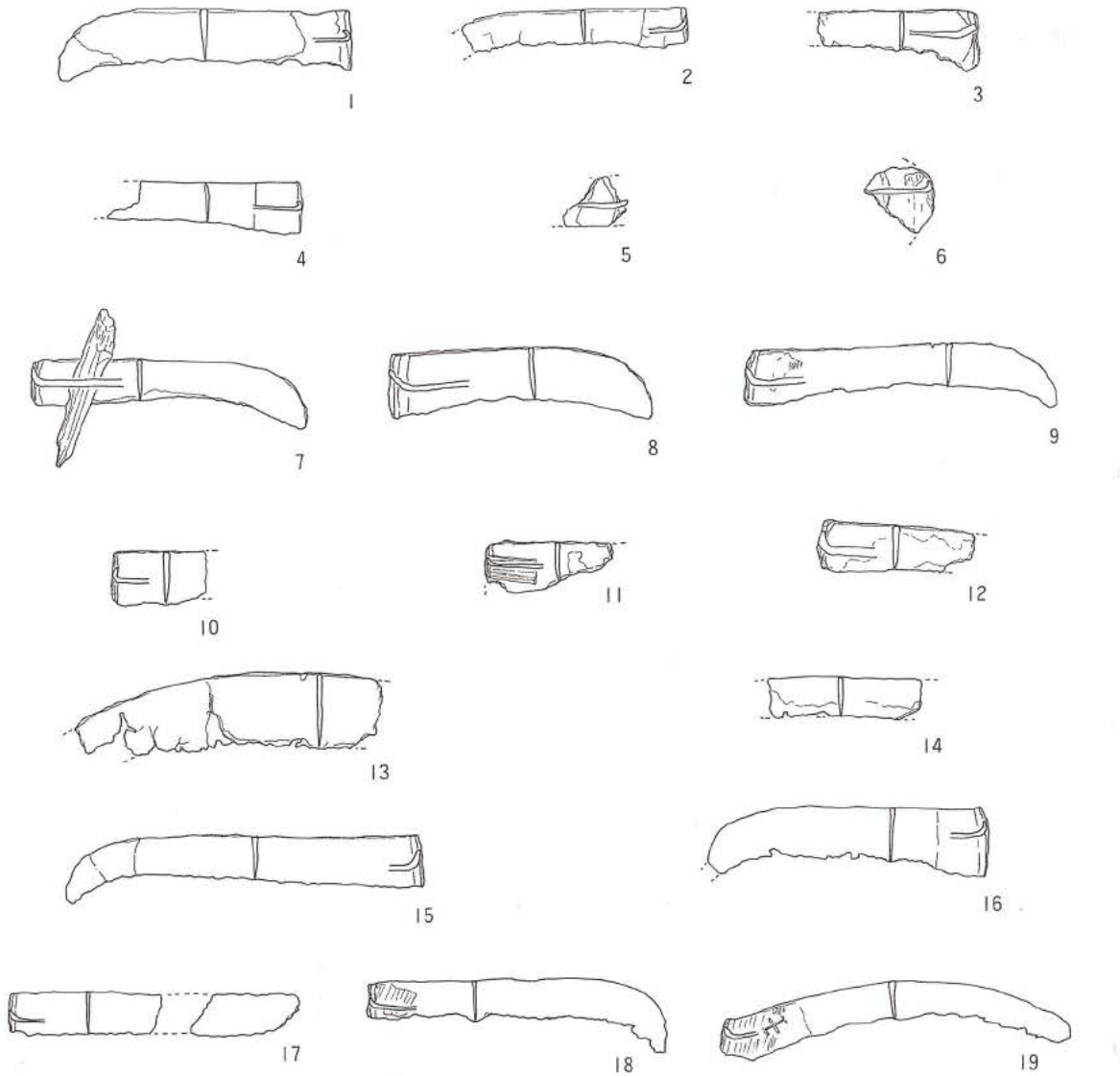
であるとした説^④や、「曲刃鎌の折返しは日本列島では古墳時代中期までは甲類が多く、古墳時代中期以降乙類が増加する。朝鮮半島では曲刃鎌乙類が主流を占めることから日本列島の曲刃鎌乙類出現は朝鮮半島の影響がうかがえる^⑤。」とする論考がある。赤野井湾遺跡や小津浜遺跡で鉄鎌の折返し乙類の出土が半数以上占める。乙類が渡来系工人の影響で造られたものであるとしたら、赤野井湾周辺でも渡来系文化について検討しなければならない。

×の刻印

小津浜遺跡出土(19)の中型曲刃鎌は基部の着柄部分に×(あるいは×か)印が刻印されている。×の刻印は神庭荒神谷遺跡出土の銅剣358本や、加茂岩倉遺跡出土銅鐸にも×印があり、同じ工房で造られたものか、あるいは靈力を封じ込める封印ともいわれ注目されている。鉄鎌(19)の刻印は着柄部の木質の下に隠れ使用時には見ることのできないことから、製造時点で製作者が何らかの意味を込めて刻印したものであろう。小型丸底壺などの祭祀遺物と共に出土していることから祭祀に用いられた可能性もある。

まとめ

今回出土の鉄鎌はほとんどが中型曲刃鎌で着柄角は鋭角であることから、稲刈や草刈などの農作業に使用されていたと思われる。遺物の時期は古墳時代中期から後期と思われる。赤野井湾遺跡・小津浜遺跡では弥生時代後期までの石製穂摘み具である石包丁が数点出土している。また、赤野井湾遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の木製穂摘み具である木包丁が7点出土している。赤野井湾周辺は稲刈復用の石包丁→木包丁



赤野井湾遺跡出土(1~14) 小津浜遺跡出土(15~19)



赤野井湾遺跡・小津浜遺跡出土鉄鎌

→鉄鎌の変遷をたどることができる希有な遺跡である。
(濱 修)

註

- ①「赤野井湾遺跡」『湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1986 「小津浜遺跡」『文化財調査出土遺物仮収納保管業務昭和62年度発掘調査概要』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1988
- ②田井中洋介「集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート」『紀要』第9号 (財)滋賀県文化財保護協会

- 1996
- ③寺沢薫「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究』4 雄山閣出版 1991
- ④都出比呂志「農具鉄器化の諸段階」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 1989
- ⑤金田善敬「古墳時代後期における鍛冶集団の動向」『考古学研究』第170号 考古学研究会 1996